

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

グローバル化統治に抗するバスク伝統スポーツ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之, TAKETANI, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2009

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



グローバル化統治に抗するバスケット伝統スポーツ

竹谷 和之

問題の所在

グローバル・スポーツの典型はオリンピックや世界選手権などに代表される近代競技スポーツである。さらに近代競技スポーツを不動のものとするテクノロジーと経済の支配が上書きされる。ルール統一によるスポーツの画一化は世界に共有されるといふ特徴をもつが、一方でローカルな意味が付与された独自性が消失し、少しずつ「味気ない」スポーツへと変容していく。現在、世界柔道連盟には日本人理事がいなくても成立し運営がなされ、日本の「柔道」が「JUDO」へと変容してしまった。「あれは柔道ではない」という主張が日本側からなされたのもそうした経緯による。

ある一つの伝統スポーツがグローバル化すれば全く異なるスポーツへと変容することであり、それも西洋スタンダードによって規格化されると言い替えることができる。ヨーロッパ以外の伝統スポーツはこのように「植民地化」プロセスを経過して近代化を遂げるが、ではヨーロッパ内の伝統スポーツは完全にグローバル化変容していくのであろうか。

バスケット伝統スポーツは組織、運営、競技規則などが整備され近代化している。⁽¹⁾これは近代スポーツが主流となってい

るスポーツの世界で、伝統スポーツが生き残る方法を模索された結果であり、さらにバスケット人の伝統スポーツに対する考え方が徐々に変化してきていることを表す。つまり不可逆の歴史の中で過去へのノスタルジーに浸るのではなく、原初的意味や価値を保存させる工夫が凝らされているといえる。とくに近代的組織化によってスペイン・バスケット州内では他の近代スポーツと同等に扱われ、同州スポーツ連盟に「バスケット」という下部組織が組み込まれている。他と同等である以上ドーピングチェックなども導入され、選手管理も徹底されている。二〇世紀後半、石かつぎのチャンピオンのサラレギがドーピング違反と判定され、バスケット州スポーツ界から姿を消してしまったことは大きな衝撃として記憶に残っている。一方フランスバスケットの場合は、近代競技スポーツからは隔離され、独自の組織を立ち上げて運営されている。

以下に掲げる伝統スポーツ種目はスペインとフランスに約三〇〇万人居住するといわれるバスケットで共有され登録されているスポーツ種目である。



丸太きり（オノ、ノコギリ）
 石かつぎ
 石引き（牛、ヒト、ロバなど）
 草刈り
 金敷上げ（アングーデ）
 重り運び（チンガス）
 荷車移動（フアルド）
 キビ袋運び競争
 競走
 干し草上げ
 綱引き
 レガッタ
 牧羊犬の競技
 闘羊
 ペロタ
 九注戯



以上はおもに労働から派生したものがほとんどである。山バスクおよび海バスクとに区別すればある程度理解可能であろう。それ以外に宗教起源と言われる球戯などもある。通常、労働と遊び（＝スポーツ）は対極にあり、それが入れ替わることは珍しいことである。ましてや一つの文化圏の代表的存在となるためには、何らかの公準がそこに存在すると思われる。競争が強調されれば内在する意味を消去され、競うことが第一義となる。不可視の領域にじっくり目を凝らせば何が見えてくるのか。

多くのバスク伝統スポーツの中には強靱な身体がぶつかり合う格闘技はない。^②少数民族は外部勢力への身体準備として格闘技を伝承するのが一般的であるが、バスク人にはその形跡すら見ることができない。この不在への違和感はバスクへ通うようになって徐々に増大するようになった。バスク伝統スポーツは前述したように原初は日常労働であり、現在いくつかは機械に取って代わられ身体を駆使した労働は役割を終えている。しかし「穴あけ」のように鉄棒で石に穴をあける伝統スポーツは、かつて当該地域にあった石切場の労働を偲び、アイデンティティの確認のため復活したのもある。

ピレネー山脈や近隣の急峻な山間部では自給自足の生活を営み、家族およびアウソアという隣組が一致団結して営みが続けてきた。カセリオ（農家、バスク語でバセリ）の基本形は石造りの三階建てで、一階に鶏やブタなどの家畜小屋、二階が居住部屋、三階は物置になっている。その毎日の生活に必要な労働が競技へと変化したといわれている。

変容理由としてアギーレ・フランコによれば、単調な日々には刺激を与えるため、あるいは守護聖人祭などのハレの日には労働から解放され娯楽に興じるためとされている。そこでは日常労働が想像できる競争、それも二者間の伝統スポーツ競技が競われる。さらにこのスポーツには単なる競技志向だけでなく賭が目的であった。バスク伝統スポーツの近代的組織化はこの賭の制度を確立して、諍いや暴力沙汰を回避することも重要な目的であった。^③

しかしそれ以外にも歴史的選択があるのではないかと考えるようになった。稲垣はキリスト教への改宗と格闘技放棄がセットになっているのではないかと仮説を提示しているが⁽⁴⁾、確たる状況はまだ把握できていない。筆者はそれよりも労働を競うことは仕事の能力を測るうえできわめて有効であり、その競うことを名目にして強靱な身体を準備していたのではないかと考える。つまり競技化という形式をとりながら闘う身体の準備を水面下で行っていたという視点である。ブラジルのカポエイラや琉球舞踊は、すでに指摘されている通り少数者（あるいは政治的弱者）による格闘の身体的準備として機能してきたのである。

バスク史はつねに外部勢力との接触の連続であった。古代ローマ、フランク族、ゴート族、イスラム勢力、フランス、スペインなど緊張状態がひっきりなしに存在した。その勢力、ときには同時に二つ以上の勢力均衡を保つための準備はとても重要である。徴兵制度がなかった時代は、優秀な兵士は一般農民であった。その彼らの特徴は労働で鍛えられた身体であった。また遊びやダンスで形成された敏捷な身体にあったと言えよう。これらの身体は見逃されるはずもなく、「有用性」として活用されたと思われる。

兵士としての選別方法はダンスであったといわれる。その土地のダンスを踊らせ、身体能力を測ったのである。これは「武と舞は同根」と言われるように、戦う能力はダンスの能力と同一である、という考えに基づく。逆に優秀な舞踊家は優秀な兵士でもある。したがってバスク伝統スポーツは、外

部勢力に対抗する身体準備であるという仮説をたてて、本論は進めることにする。格闘技は個人的戦闘技術として精神的肉体的な最後の手段と考えることができる。

前述の仮説へとアプローチするために、ジェームズ・スコットの「ゾミア」論および土佐弘之の「野生のデモクラシー」を参考にして進めたい。二人の論はバスク伝統スポーツの新たな視座へと導いてくれると考える。前者はグローバル化抵抗手段としてバスク伝統スポーツを把握できること、後者はバナキュラー性を保持したまま近代化を進める文化生成の場としての可能性を言及可能としているからである。

1. 新たな指標としての「ゾミア」

1-1. スコットの「ゾミア」論

スコットは一九三六年米国生まれ。イエール大学で政治学博士を取得後、他大学を経て最終的にはイエール大学で政治学部と人類学部とで教鞭をとった。フィールドワークを中心におき、現場と理論をつねに検証し独自の視点を提示している。『弱者の武器』は『ゾミア』を完成させる研究であったといわれている。

スコットの『統治されないようにする術』には、通常の年表に示されるような国家中心の歴史の陰で営まれる無政府主義的歴史パラダイムの観点が取り入れられているという。ゾミアとは大陸部東南アジア（ベトナム・カンボジア、タイ王国、ミャンマー、インド東北部、中国雲南・貴州、広西及び四川の一部）に広がる標高三〇〇メートル以上の山地をい

う。そこに居住する山地民の歴史は国家形成から取り残された歴史ではなく、二〇〇〇年にわたって奴隷、兵役、徴税、疫病そして戦争といった国家形成プロジェクトの抑圧から積極的に逃れてきた社会の歴史であるという。このスコットの主張には、これまで中心であった国家形成の歴史に一石を投じる斬新な発想といえる。

このことから完全な隔離とまではいかなくとも、少数民族と称される人々は大なり小なり困難な選択を強いられてきたのである。この少数民族という観念も自ら名づけをしたのではなく、国家形成過程のなかで他者により命名されたものである。信仰、生活形態、価値基準など日々の生活に必要な要素（「根をもつこと」）を守り抜くためには、ある程度の従順を持ち合わせなくてはならない。それができないならば、国家勢力に影響されない奥地へと移動・移住しなくてはならないであろう。ゾミアは後者の選択をしたと言える。

また山地に住むということは物理的可動性が高く、長距離を移動でき状況に応じて組み合わせる生存技術の幅を持っているといえよう。特徴として、居住地が高い場所や奥地であればあるほど、国家の中心部や奴隷狩り、徴税から離れることになる。次に居住が点在しているほど、侵略者や国家にとって標的の魅力がなくなること。三つ目には状況に応じた生業技術の調整であって、いかに権力から距離を置くかが選択されるのである。

スコットはおもに東南アジアを中心に述べているが、この視点をアルプスやピレネーに応用することは可能である。とくにバスク地方は口承文化であり、山地居住との接点を探り

たい。⁽⁵⁾

1-2. 土佐弘之の「野生のデモクラシー」論

前述のスコットのゾミア説を発展させて、土佐は新たな生成変化の生まれる契機として「野生のデモクラシー」を捉えている。筆者はこの概念をバスク伝統スポーツ文化理解の主たる理論として採用したいと考える。

それは国家なき社会を歴史以前の社会とするようなヘーゲルの歴史哲学観ないしは進歩史観そのものを否定するという意味で大きな衝撃となりうる。バスクは国家を持たず、いつの間にか国家に組み込まれていたといえよう。「野生のデモクラシー」とは制度に飼いつけられない、異議申し立てを続ける運動としてのデモクラシーを指すという。それはゾミアという地域だけでなく、近代国家によって囲い込まれた政治的空間の中にも息づいている、とする。視点を変えればこの「野生のデモクラシー」は身近なところにも見いだすことができる。そして土佐はアバンスタイルの説を引用しながら、非支配の状態保持を目指す行為であり、障害に直面するとともに立ち現れてくると説明する。普段は実質的な内容や目的を欠いており、問題が生じれば自己生成（オートポイエーシス）を続けるしかないのである。

これはネオリベラルなグローバリゼーションのもつ構造的暴力を批判し、国家の治安維持装置による直接的暴力を白日の下に晒す役割をはたしたという。また、メディアはこうした直接行動の暴力的側面を強調することで、デモクラシーの正当性をはぎ取り、アナキズム＝暴力・カオスのイメージ

を再生産していると指摘する。

このことは日本における現在進行形の事案（沖縄、やフクシマなど）を考える指標となることは間違いないと思われる。⁶⁾

2. バスクの地理的変遷

現在のバスク地方には有史以前の遺跡などが多数残されており、人々が散在して生活をしてきたことが実証されている。とくに、ミゲル・デ・バランディアラン神父を中心とする考古学研究会は「バスクとは何か」という問いを過去に追いつめていた。その後彼の起こしたETNINKERという研究会に引き継がれ、活発な研究活動が継続されている。

旧石器・新石器時代の洞窟壁画や巨石建造物などからは、人々の移動や居住空間、食、儀礼などが報告されている。資料によれば、一世紀には北はフランス・ボルドー、東はピレネー中部、南はサラゴサ、西はブルゴスやサンタンデルまでの広範囲でバスク語が話される地域となっていた。バスクが歴史に登場するのは、カエサルのカリア戦記が最初とされ、それ以来のローマ帝国支配としての都市建設であろう。バスクだけでなくスペインやポルトガルにまでローマ帝国の痕跡として住居跡、道路や水道橋などが残されている。ここでは水利の重要拠点はほとんどすべて抑えられていた。

パンプローナもその一つである。ローマの勇将ポンペイウスから名づけられたという街は、北はエブロ川と断崖の要塞に守られ、南は進入してくる外部勢力を高台から見張ることが可能であった。その後民族大移動により、六〜七世紀には

東西両サイドからビシゴート族に囲まれながらもバスクーネス (Vascones) という一族は現在の地に居続けた。ピレネーの複雑な地形が外部勢力が奥深くにまで進入することを防いだといえよう。八世紀になれば南はイスラム勢力、北はフランク族そして西はアスツリアス王国と対峙しながら均衡を保っていた。

それが一〇世紀になれば、バスク語圏は一世紀の半分近くまで縮小してしまう。中世には中核都市の建設が進み、ビルバオ、サン・セバステイアン、ビトリアなどの現在の基礎がほぼ出来上がった。しかしバスク語は現在のバスク文化圏よりも広範囲で話され、一六世紀にはほぼ現在のバスク地方と重なっている。これはナバラ王国の消滅（一五一二）により、カステイリア王国とアラゴン王国がバスクを挟むようにして成立し、徐々に使用範囲が限定されたと考えられる。これは労働力としてスペイン人の流入が言語的混淆を促すきっかけを与え、また観光、商業、政治などでスペイン語が公用語として定着していくという多岐にわたる要素が絡んでいた。二〇世紀には現在のバスク文化圏の半分程度になり、バスク語が話されなくなりつつある。⁷⁾

とくに市民戦争後フランコ独裁（一九三九〜七五）が与えた影響はバスク文化を衰退させることになった。とくにバスク語やカーニバルは禁止、その他のダンスや即興詩（ベルチヨラリ）も取り締まりの対象となり、バスク語を介した文化は屋外では制限され、公共空間から姿を消していった。この言語的縮小は外部勢力の拡大と対をなしており、つねに異文化と軍事的境界線との間に密接な関係があったといえる。

3. 格闘技マキル・ボロカ (La Makil Borroka)

二〇一四年九月、ギブスコア県オイアルツン村でマキル・ボロカ (La Makil Borroka) あるいはマキル・ヨコア (La Makil Jokoa) と呼ばれる格闘技に出会った。バスケットに訪問してから三〇年来一度も出会うことがなかったスポーツである。ほとんどのバスケット人や研究者は名称はおろかその存在すら知らなかったという。愛好家のみに伝わるその技法はかなり動きが激しく実践的であった。マキル (Makil) とは棒、ボロカ (Borroka) は戦い、ヨコア (Jokoa) は遊びという意味である。じたがって日本語では「棒術」と訳すことにする。

愛好家代表のG氏によれば、このマキル・ボロカは村に伝承されている技を長老に尋ね、教えを乞うたという。彼は幼少の頃より格闘技に興味を抱き空手や合気道などを習得しているうちに、最終的に自分の住む村にバスケット格闘技マキル・ボロカがあったことを知る。それ以来、他の愛好家とともに熱心に棒術の稽古を重ね、時にはイタリア・シシリヤ島やポルトガルにまで足を伸ばし、マキル・ボロカに近似した格闘技の伝承者を訪問し交流しながら、理想の技を習得する努力を続けている。

G氏はマキル・ボロカに関する文献について語る場合、以前は棒術と呼ばれてはいたが敏捷性、スキル、「操作」という意味をもつ格闘技的側面を考慮すれば「棒を用いた敏捷性」であるという。(二〇一四年九月一三日談)

3-1. 叙述にみるマキル・ボロカ

格闘技術は成文化せず口伝や身体で伝えていくことが一



般的である。これはどの分野でも同じことである。例えば古武道師範に付き従い稽古をしていけば、ある程度までしっかりと「形」を身につけることができる。一方逆に、見よう見まねで技の模倣を繰り返し自らの感覚で会得していく場合、技法解釈には偏りが見られる。本来の技ではない応用が可能となり知らぬ間に上達している例もあるが、一旦逸脱してしまえばもとに戻ることは容易でなく、非合理的な技に拘束されてしまうことになる。

現在マキル・ボロカには賭(競技者同士、観客など)は存在しない。組織を形成するほど多くの愛好家がおらず、またルール化もなされていない。相手を打ち負かすことを前提とした格闘技には「形」はない、とG氏はいう。臨機応変な身体移動、咄嗟の体捌き、敏捷な足運び、前後左右の空間把

握など相手の数に合わせた動きと棒の操作が有効とされる。以下は文献に記されたマキル・ボロカである。

3-1-1. ララメンディ

「とくに剣の代わりに棒を使用するときには剣術の技法は役立たなかった。それは打突を与えて受け身に転じるとき、また致命傷を負わせたり防禦のときに、このようにしつかりと操作する方法は相手の打突を回避しながら浴びせたりするときである」

「狩人や青年は長い頑丈な杖を持ち、それらは坂や山を下るときに使う。ときどき武器や護身用以外で使用する場合、たとえば子供のしつけや口論には剣ではなく杖を好む」⁽⁸⁾

3-1-2. イスツエタ⁽⁹⁾

「棒術・ギプスコアではつねに敏捷で、力強いそして有効な棒の使い手がいた。彼は仲間やサーベル使用の剣術家などと喧嘩をしても最終的には勝つのであった。」

二六年ほど前、二人の兵士がトロサまで荷物運搬の依頼のため、ベアサインのバレンダイン地区の生まれのホセ・ドミンゴと契約した。目的地に到着後、再度彼に同じ仕事を強要しようとした。しかし道半ばで日が暮れた。二人の兵士は防護のためサーベルを身につけていたにも拘わらず、二人に牛を急かせる棒突きの一撃が来た。ホセは家に戻り唯一の反撃として手には短棒をもっていたのである」⁽¹⁰⁾

「ナポレオン軍のスペイン侵入後に、サーベルで武装した

二人のフランス軍兵士がトロサからエミアルデに来た。要はニワトリを盗むためビダニア生まれのバウテイスタが住む農家に来たのであった。二人の兵士に対してバウテイスタは棒で反撃した。サーベルとの激闘で棒が折れてしまったので、妻を呼び部屋の扉の後ろに置いてある太い棒を取りにやらせた。妻がすぐにとつて返して棒を渡すと、手に持っていた短棒の破片を敵の目をめがけて投げた、一方妻が投げた棒で敵の股間に引っかけたので起き上がれないようにした。そのすきに報復されないように妻子どもも逃走した。⁽¹¹⁾

前述の例でわかるようにフランス軍の兵士よりもかなり腕が立つ農民が多数いたことになる。そしてその技は俊敏で反撃の隙を与えず、効果的な打突が繰り出される。このような技は窮地に立つてすぐに身につくものではなく、常日頃から稽古をしなければならぬ。農作業の間をぬって行われるのか、それとも特別な時間を設けていたのかはここでは判別しがたい。棒の使用は距離を保つためと、護身から攻撃へと転じる重要な武器となりえたからであったと思う。それは常に緊張状態のある環境が技の習得を容易にさせたと考えられる。これは常に外部勢力と対峙しなければならなかったバスク人の基本であったといえよう。

3-1-3. フランスバスク

「些細な口論でさえ棒が振り上げられた。バスク人はサーベルや剣などのように様式が整い師範が教授するような技術を用いて棒を扱う。最も危険な武器は鞘に入れたナイフで

ある。武器使用することを恥ずかしく思っではならない、彼らは私たちのものよりかなり短い棒をつかっているのだから⁽¹²⁾

この説明ではかなり高度な技法を身につけていたようだ。棒術だけでなくナイフ（短刀）を駆使できることは、護身術としてかなり用意周到ではある。一九世紀には食料調達として農家を襲うことは日常茶飯であったと推測するが、その自己防衛として最小限の準備をしていたと考えられる。前述の数例では軍人の横暴が目につくが、移動せず慎ましやかに生活する農民から食料を奪い取る構図は過去だけでなく、現在でも世界各地で確認しうる構図である。

3-2. 現在のマキル・ボロカ

マキル・ボロカの特徴は棒の堅さである。強烈な打突でも折れることなくそして重い。

また棒の長さは数種類あり、G氏は以下のように説明する。

棒の使用は二〇世紀初期まで広範にわたって普及していた。多くの方式がありそれぞれ独自の道具や技術を持っていた。短棒は三〇〜四〇センチ、通常は九〇センチ、長棒は一〇〇〜一五〇センチ、最長棒は二メートルあった。強打や速さが伴う多様な打突があり、接近戦で闘ったり、ときには鉄の棒などを使用していた。

私たちが継承した長棒（一二〇〜一五〇）以外の棒を扱うグループは消滅した。長棒は力技であり、力と速さでもって

敵の防御へ打ち込むことに徹するのである。

技の基本を修得すれば、技法の消滅を避けるために二人以上の仲間とともに指導を始めた。技法継承のためにオイアルソン役場と共同で愛好会を立ち上げ、他のヨーロッパ格闘技団体とも交流をしている。シシリア、カナリア諸島、ポルトガル、ベネズエラなどである。

さらに棒の種類とその使用例を詳細に説明された。

3-2-1. 短棒（三〇〜四〇センチ）

接近戦の闘いに用いられる、狭い場所や大勢人がいる場合など（バル、ダンスなど）。通常、棒はもとは散歩杖や旅行杖であり、これは最初の使用例である。防禦としての使用はおもに二次的であるが、昔は道行きはとも危険であった、旅は徒歩で行われ、そのほとんどが夜行であった。道行きを容易にし歩行者を補助するものとしての杖は、命や荷物を守るためや、怪我をしたり危険に晒されたりして旅に不要な状況が付加したときに使用される（ステッキの金属製石突は本来はぬかるみとの接触を避けるため、あるいは杖の先を泥で汚さないようにされていた。そして取っ手を皮で巻いて手首に巻き付ける紐があった）。

3-2-2. 長棒（一二〇〜一五〇センチ）

道行きの補助として使用された（とくに南バスク）、家畜の誘導が主であるが防禦・攻撃目的の杖は長さ重さともに際立っていた。距離をおいての格闘や多勢の敵との闘いでしな

やかに動くことが含まれる。二メートルの最長棒は移動の補助として使われ、小川を飛び越えて近道をしたりした、また闘いで使用するときには距離をとりながら対峙する場合に用いられた。長棒と最長棒は馬上の敵と闘う時にも使用された。

長棒は木の枝をそのまま利用した先をしていた、打突に効果的であり手の保護にもなった。

マキル・ボロカにはその技術を記したものは少なく、いわゆる技術体系なるものはない。その場の状況に応じて対応するしかないのである。しかし筆者が見た限りでは、いくつかの「形」があるように思える。打ち込まれたときの対応の仕方、足の運び、返し技などである。今後はさらに多くを観察する必要があるが、その速い動きの中で咄嗟の判断を身につけることは、実践（柔道で言う「段取り」）で身につけるしかない。棒は凶器に変化する限り、かなりの集中力を要する稽古となる。

4. 新たなスポーツ文化生成

過去には確かに棒術は存在した。それもサーベルを身につけた兵士を相手にして、それも圧倒的な威力を発揮した。記録に残されるくらいの激しい、あるいは兵士勝りの技術を持ち合わせていた例が伝えられている。これが氷山の一角であるならば、潜在的格闘家は無数にいたのではないか。つまり農家には少なくとも一人は棒を扱える男性がいたと考えられる。いざという時に家族を擁護するべく、つねに使用でき

る場所に置かれていたのであろう。バスク農家の労働力は家族であり、多くの子どもが家計を支えていた。七〇八名の子どもをもつことは一般的であり、彼らの協力で自己調達が可能であった。その意味では農家には必要物がほとんどが揃っているということになる。

それが現在に至っては、ほとんどのバスク人が棒術を知らないという。ビスカヤ県に住む友人の兄がバスク学会の会報で探し当ててくれた小さな記事には、この存在に関する情報収集の段階であった。つまり学会員でさえマキル・ボロカが存在を知らなかったのである。人づてにG氏に行き着いたときには、逆によく探し当てたと相手からねぎらわれた。現在はオイアルツン村で公的補助を受けながら普及活動に勤んでいる様子を見る限り秘匿する必要はないようだ。

4-1. 消滅の理由

棒術を駆使して闘う場面を想定してみよう。棒が有効な働きをする時代は限られていたと考える方が妥当であろう。つまり一八世紀や一九世紀には個人的武器としてはサーベルが主流であった。もちろん鉄砲は使用されていたが、使用場面は限定的であった。武器使用の最終段階で満を持して棒が登場する。切羽詰まった段階ではじめて使用される奥の手だったのかも知れない。

メリメ作『カルメン』⁽¹³⁾にもマキラ棒が登場する。主人公のドン・ホセがペロタ試合で口論となり棒で相手を殺してしまい、生まれ故郷のエリソンド村を離れなくてはならないこ

とになった。その理由が「マキラ棒殺人」である。ペロタ試合の結果が原因で口論になり、引くに引かれぬ闘いで人を殺めたのである。その後彼は軍隊で働くようになり、カルメンと出会うのである。

スペイン・ナバラ県北部バスタン谷にエリソンドという村が実際にあり、使用されていないフロントンも壁の一部になってひっそりと佇んでいる。一五村でバスタン谷を形成しており、一九世紀には北東部の村の一つアマムール村では、激しい戦闘があったという。⁽¹⁴⁾ ちやうどフランス国境近くにあり、つねに外敵の侵入と対峙してきた。その意味では棒術の心構えは必要であった。

しかし二〇世紀に入れば棒術を使用する機会が減少し、徐々に廃れていったのではないか。国民国家制度のもとで軍隊が闘いの専門集団となり、農家一人ひとりには外敵を心配する必要は薄れていったと思われる。また、もし対戦したとしても、棒では太刀打ちできない銃や大砲などの武器の差により負け戦は歴然としていた。

とくにスペイン市民戦争（一九三六〜三九）後には、バスケットは文化的弾圧を受ける。フランコの政策は徹底的にバスケット文化を消滅の方向へ向かわせた。秘密警察が目を光らし取り締まりを強化して、レジスタンスを押さえ込む策も講じられた。このように個人的技法であった棒術はその使用ができないほど困り込まれた状態にあったといえよう。

4-2. バスケ伝統スポーツの役割

棒術という身体技法の準備が不可能であっても、非常事態

に対処することは必要である。そのために労働をスポーツとして行うことで身体の準備をしたと言えないであろうか。もちろん二者間の賭は重要な要素であるし、競技者間や観客の楽しみのグレードも上がる。現在三〇〇万人程度の人口にこれほどまでに多くの伝統スポーツが伝承されている理由が推測しうる。各自が何らかの伝統スポーツをしたり関わりをもつことの意義がおぼろげながら理解できる。

筆者が感じた違和感は巨体を駆使して、労働よりも激しいスポーツをスティックなまでにルールに従い競争するバスケット人の姿である。近年の伝統スポーツ競技者はかなり専門的になってきているが、初期の意図はまだ健在だと思われる。それは素手のペロタ球戯である。硬球を素手で打つことがバスケットでは一番意義のあることと評される。硬球を打つ素手の保持は労働効率という経済優先原則へのアンチであり、また道具に依存する身体への抗いである。もちろんこれは格闘技に直結することは間違いないであろう。

例えば、フランスバスケのサラ村のペロタ競技場（フロントン）には、一人の人物が大きなレリーフにして設置されている。その名はビクトール・イツリア（二九一七〜四四）、サラ村出身のペロタ・チャンピオン（素手）である。彼は一九四四年にイギリスで亡くなるまでは、ファシストへのレジスタンス闘士として有名であった。その彼のレリーフはペロタ・ボールを打つ姿勢と手榴弾を投げる姿がほぼ二重にされ、その偉業（ペロタと戦功）を称えている。その類い希な身体能力がバスケの象徴となつていたのである。⁽¹⁵⁾

4-3. 「力」の意義

どのバスク伝統スポーツをとってみても、その力技が突出している。丸太切り、石かつぎ、石引き、草刈りなど、労働が力仕事であることは間違いない。しかし通常、労働は如何に力を出さずに仕事を終えるかを模索する。その反対に競技会などで最大の力を発揮することが目標となることは、競争のみに集中せねばならず意味もことなる。競争や賭などではなく、その内奥に潜む「護身」という意味は表面には出てこない。それは最終手段として見せるものではないからだ。密かに継承されることに存在意義がある。

日本の古武道でも、奥義はたやすく説明したり披露するべきものではないと言われるように、格闘技は自慢する代物ではないのだ。あくまでも身の危険を感じたときに最後に使用する技である。



それを使用しなくても良いのであれば、それにこしたことはない。バスク人が長い歴史の中で修得したことは、この身体技法ででなかつたか。つまり統治に抗う身体の準備、力を漲らせていざという時に備える。もちろん統治への姿勢は何も身体的なものだけでなく、思考をめぐらせることももちろん重要である。山間部のアウソアという隣組はその役目を引き受けてきたであろうし、それは今でも有効であるとき々。(16)

このように時代の変化とともに生活様式、ひいては戦闘様式が近代化しても、人々の思考の中心には「自立」あるいは「自己決定権」という選択がつねに残されている。これは現代政治の場面でもよく見られることである。

4-4. バスクダンスとの接点

G氏がいう「棒術のできる者は、ダンスもできる」というフレーズはすでに紹介したが、ここでは実際のバスクダンスについて触れてみようと思う。

まず小さな棒（四〇〜五〇センチ）のダンスである、「マキル・チキ・ダンス」。これは一二名の少年と青年が一緒に踊る。しかしこのグループにはキャプテン（隊長）という指示者が付きそう。まるで軍隊の指令のようである。グループを率いて広場に登場すると、まずキャプテン一人で始まりの踊りをする。その後一二名が棒を駆使して前後左右に場所を変え回転しながら、また相手を変えながら踊る。そのときには必ず相手の棒を打つ。リズムミクな動作、敏捷な身体、棒の位置などを見ていると、これは紛れもなく棒術であると思われる。ダンスとしての正確性は求められるものの、少年

と青年が合同で行う意義にも注目したいと思う。

Makil Txiki Dantza

もう一つは「マキル・アウンディ・ダンス」である。青年だけのグループをキャプテン（隊長）が率いて広場へ入場する。キャプテンの挨拶の踊りの後、各自九〇センチ程度の棒を用いて踊る。攻撃と受け身、棒全体を使用して打つ動作は身体訓練となる。いつも同じ相手ではなく、九〇度左右横に向き合いその相手とも打ち合う。スキップのようなステップも軽やかで、G氏が見せてくれた距離を保つためのステップにとってもよく似ている。

手と足を同時に考えながら踊ることは困難である。したがって、相手を見ながら棒を打ちおろすことに専念する。そのときは足は無意識に動いている。ステップを考えている時間は与えられないからだ。太过于重い棒は使いこなせば十分威力のある打突になりうる。

Makil Haundi Dantza

上の二つのダンスはつねに音楽を伴う。伝統楽器であるチスツ（縦笛）とタンボール（小太鼓）で奏でる音楽は軍隊の行進でも使用可能である。ダンスとして定着している身体技法は常に練習が可能である。繰り返し練習することで必要な技法は身につく。もちろん見方を変えれば、格闘技の練習ともなる。格闘技そのものをダンスの中へ入れ込むことで、密かに延命を図っているのである。現在は格闘技の必要な状況はなくなり、その技法はダンスに継承されている。しかしそ

の意味が伝承されているかどうかは心許ない。ダンスのコレオグラフィのみに注目が集まり、技法の意味論まで進まないのである。もし格闘家と舞踊家が出会う場面があれば、より緊張感のある効果的な打突が可能となるであろう。ダンス文化として定着している以上、安易に格闘技との関係を指摘されても、そこに価値を置く指導者はいないであろうし、両方の関係性は多少認めつつ実用としての認識は薄いと言わざるを得ない。

5. ポスト・グローバル文化として

スペイン・フランスのバスケットという枠組みを超えてEU内での位置づけがバスケットに与えられよとしている。二〇一六年は欧州文化首都プログラムがサン・セバスティアン市で開催される。もう一つの都市はポーランドのヴロツワフ市である。魅力的な文化遺産の発信を含めて、経済効果を見込まれる都市にEUが様々な形で援助する。バスケットがEU内である程度の認識が広まり、今後はヨーロッパ内をはじめ世界的展開を目指している。

その中で伝統スポーツはいかなる役割を担うのであろうか。その前に労働から派生したバスケットスポーツは近代化を取り入れ整備されてきたが、世界で受け入れられるほどの変容は遂げていない。つまりグローバル化させて異文化圏でも受容されることは考えられていないのである。変容の限界を超えてまでは考慮されていない。一方、ディアスポラの場合には文化受容媒体がすでに整っている。「バスケットの家」という文化センターが催しを計画し、定期的に現地で披露され

る。

しかし筆者が考える「格闘する身体の準備」としての伝統スポーツはこれ以上変えてはならないし、取り巻く環境の影響で常に変化するのではあればグローバル化という外圧にも屈することになる。自文化が世界に普及することは良いことだとして喜ぶ向きもあるが、そうではなくバスクアイデンティティをいかに保持するかが、彼らにとつてとても重要なのである。その一つがマキル・ポロカの復活である。格闘技を使用する機会が極端に減少しているとはいえ、身体に「力」を漲らせて外圧に備える技法である。この意識の温存がスベ

インのバスク統治あるいはグローバル化統治に抗する意識に直結するのである。

「力」の持つ漠然とした空恐ろしきものはバスクの潜在的な特徴でもある。これこそがグローバル化社会で異彩を放ち、人々の心の支えとなる所以である。だからこそこれ以上グローバル化する必要もなく、バスクの人々に共有される時空間を確保するだけで良いのである。バスクの守護聖人祭のメインプログラムとして登場するバスク伝統スポーツは、グローバル化統治に抗する象徴である。

【注および引用文献】

- (1) 竹谷和之「エスニック・スポーツと近代化」日本体育学会編集『体育の科学』七月号第四〇巻・第七号、杏林書院、一九九〇年、五二八〜五三二頁。
 - (2) バスク伝統スポーツについて最初にその全体像を叙述したアギーレ・フランコの著作には格闘技は登場しない。その後に続く多数の出版も同様である。
 - (3) Aguirre Franco, R., *Enciclopedia ilustrada del Pais Vasco - Juegos y deportes*, Añamendi, Donostia-San Sebastián, 1987.
アギーレ・フランコ氏が中心となり、一九七九年六月サン・セバスティアン市においてバスク七地域（アラバ、ギプスコア、ビスカヤ、ナバラ、ラブル、低ナバラ、スール）の伝統スポーツ競技代表が集まり、連盟設立の協議がなされた。その折に、競技ルールが統一・制定され、以後賭試合において揉め事がないようにされた。
 - (4) Agirre Franco, R., *Gurre Herria juegos y deportes del Pais Vasco I*, Kriselu, 1989, pp.38-46.
稲垣正浩『スポーツの後近代 スポーツ文化はどこへ行くのか』三省堂、一九九五年、二五〜三三頁。
 - (5) ジェームズ・C・スコット著、池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈共訳『ゾミア 脱国家の世界史』みすず書房、二〇一三年、一三〜二二頁。
- Scott, James C., *The Art of Not Being Governed An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press, 2009.

- (6) 土佐弘之『野生のデモクラシー 不正義に抗する政治について』青土社、二〇一二年、二七四〜二八二頁
- (7) 萩尾生、吉田浩美編著『現代バスクを知るための50章』明石書店、二〇一二年、三三二頁。
- (8) ララメンデイ(一六九〇〜一七六六)は作家、神父、歴史家などの多様な顔を持ち、バスク民俗文化研究の先駆者といわれている。
- (9) Larramendi, Manuel de, S.J. *Corografía o descripción general de la muy noble y muy leal Provincia de Guipuzcoa*, Director: J.I. Tellechea Idigoras, Sociedad Guipuzcoana de Ediciones y Publicaciones, Donostia, 1969, pag. 234&215. (Obra original de 1754)
- (9) イスツエタ(一七六七〜一八四五)はバスク語研究者であり、またスペイン・ギプスコア県のダンスについて造詣が深く、彼の著作はバスクダンス研究の里程標となっている。
- (10) Izueta, J.I., *Guipuzcoaco dantza gogoangarrien condaira edo historia, beren soñu zar eta itz neurtu edo versoaquin*, Donostia, 1824, pag. 181.
- (11) *ibid.*, p.181
- (12) M. de Jouy, *L'Hermite en Province (Moeurs Françaises) edo Observations sur les oeurs et usages français au commencement du XIX^e siècle*, 4. Edición, 1-er Volumen, Editorial Pillet, Paris 1818, pag.168
- (13) 杉捷夫はペロタを「ポーム」、棒を「マキラ棒」、堀口大學は「ハイアライ」「マキラ」と訳している。マキラは通常は誰も持ち歩き、また先には鉄製の仕込みがある独特の形状をしており、バスク人は誰でも持ち歩く。小説の場面では格闘の武器として使用されている。
- (14) メリメ、杉捷夫訳 『カルメン』岩波書店、一九八七年(初版一九二九年)三八頁。
- (14) メリメ、堀口大學訳 『カルメン』新潮社、一九八七年(初版一九七三年)三七頁。
- (15) アマユール村はフランス側から進入してくる敵を最初に迎え撃つ幹線沿いにある。入り口に大きな門があり、そこから一本の通りが上り坂になり両サイドに家屋が建ち並ぶ。どの家も外敵から身を守るために扉は頑丈にされている。
- (16) *El mundo de los Pirineos monográfico Baztan y Xareta Valles de Ensuño*, Edizionak SUA Bilbao, No 93, mayo-jinio 2013, p.20-22. レリーフには手榴弾を投げる姿の後ろに少しずらして重なるように、ペロタ選手の打突の瞬間が表現されている。
- (16) *ibid.*, p.22.
- (16) 萩尾、吉田(二〇一二年)、四八頁。

【参考文献】

- Agirreazkuenaga Zigorruga, J (director), *Nosotros los Vascos Gran Atlas Historico de Euskal Herria*, Lur Argitaletxwa, S.A., 1995.
- Agirre Franco, R., *Gurre Herria juegos y deportes del Pais Vasco I, II, III*, Kriselu, 1989.
- Agirre Franco, R., *Enciclopedia ilustrada del Pais Vasco - Juegos y deportes*, Aunamendi, 19
- El mundo de los Pirineos monográfico Baztan y Xareta Valles de Enseno*, Edizionak SUA, Bilbao, No 93, mayo-junio 2013.
- 萩尾生' 吉田浩美編著 『現代バスクを知るための50章』明石書店' 二〇一二年
- Izueta, J.I., *Guipuzcoaco dantza gogongarrien condaira edo historia, beren soñu zar eta itz neurtu edo versoquin*, Donostia 1824.
- Izueta, J.I., *Gipuzkoko dantzak eta pilotari, makilkari eta palankarrien jostaketa gaineko itz bi*, Biblioteca de autores vascongados.
3. Tomoa, Donostia, 1896
- ジエームズ・C・スコット著' 池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈共訳『ソミア 脱国家の世界史』みすず書房' 二〇一三年
- Larramendi, Manuel de, S.J., *Corografía o descripción general de la muy noble y muy leal Provincia de Guipuzcoa*, Director: J.I. Tellechea Idigoras, Sociedad Guipuzcoana de Ediciones y Publicaciones, Donostia, 1969. (Obra original de 1754)
- Larramendi, Manuel de, S.J. *Corografía de Guipuzcoa*, Larrun S.A., San Sebastián, 1982.
- M. de Jouy, *L'Hermitte en Province (Moeurs Françaises) edo Observations sur les moeurs et usages français au commencement du XIX^e siècle*, 4. Edición, 1-er Volumen. Editorial Pilet, Paris, 1818.
- メリメ' 杉捷夫訳 『カルメン』岩波書店 一九八七年(初版一九二九年)
- メリメ' 堀口大學訳 『カルメン』新潮社 一九八七年(初版一九七三年)
- Scott, James C., *The Art of Not Being Governed An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press, 2009.
- 竹谷和之「エスニック・スポーツと近代化」日本体育学会編集『体育の科学』七月号第四〇巻・第七号' 杏林書院' 一九九〇年
- 竹谷和之「ザビエルの右手」船井・松本・三井・竹谷編『スポーツ学の冒険 スポーツを読み解く「知」とは』黎明書房' 二〇〇九年
- 土佐弘之『野生のデモクラシー 不正義に抗する政治について』青土社' 二〇一二年

Deporte Tradicional Vasco contra el Imperio de la Globalización

TAKETANI Kazuyuki

El propósito del siguiente artículo es investigar la relación entre deporte tradicional vasco y su significado; especialmente la Makil borroka o la Makil Jokoa, que se ha reconstruido en la valle de Oiartzun, aunque las investigaciones al respecto aún no son concluyentes.

Desde hace unos treinta años he ido estudiando en Euskal Herria el deporte tradicional: su historia, su relación con la política, sus normas (reglamento), etc.; pero nunca he visto un arte marcial como éste. Los deportes vascos principales, como son el corte de tronco, levantamiento de piedra, arrastre de piedra, etc. se incluyen en las celebraciones patronales dentro del programa festivo, y se regulan mediante la Federación Vasca de Deportes como deporte moderno, excepto la makil Borroka. Dicen que el que baila bien es un guerrero bueno, o viceversa el que lucha bien es un danzante bueno. Es decir que podemos pensar en un mismo origen para la makil borroka (el arte marcial) y la danza. Sus movimientos parecen conectar ambas disciplinas.

Aunque actualmente se considera deporte puro vasco el que se ejecuta en las exhibiciones modernas, antiguamente podría tratarse de una táctica para sobrevivir en la sociedad y prepararse como el último medio por si acaso han de luchar cuerpo a cuerpo; ya que los vascos han tenido que enfrentarse habitualmente a los poderes exteriores: los romanos, los francos, los visigodos, los musulmanes, etc., y por tanto precisaban de la preparación física para defender a su familia y sus bienes.

Los deportes tradicionales vascos se han ido transformando en los actuales conservando sus esencias derivadas de los trabajos cotidianos, manteniendo su idiosincrasia. Es decir, que no intentan influir en los deportes de la globalización ni importar de las áreas culturales ajenas. Por otra parte, estos deportes autóctonos se han ido difundiendo mediante la diáspora, de manera que investigadores y aficionados culturales se acercan a las Euskal Etxea (Casas Vascas) en el extranjero con el fin de aprenderlos.

Me parece interesante que los deportes vascos (que preparan el cuerpo para el combate) no cambien hacia la globalización. Su mutación conlleva el peligro de perder su frescura vasca a favor de ser aceptados por la cultura globalizada. Pienso, así mismo, que es más importante recrear la Makil Borroka como medio para mantener la identidad, antes que ceder a la imposición de intereses externos.

Concluyendo, la Makil Borroka nos sirve de ejemplo de persistencia y resistencia ante las políticas de la globalización, al mantener sus raíces populares.